

## 受験者・合格者の属性

受験者・合格者等の属性に関する調査研究は、ほとんどの大学で継続的に実施している。ただしここでも、昭和62年度の受験機会複数化の影響をもろに受けて、それ以前までと様相がかなり変わってきている。このテーマに属する調査研究キーワードとして、「入学辞退者」を選択した大学が激増した事実が、複数化の影響の大きさを如実に物語っている。本研究報告書は62年度のものであるが、我々は既に受験複数化を2年経験しており、以下では部分的には63年度の各大学の調査・研究も含めて概観したい。

### 1 受験者（志願者）層及び合格者（入学者）層の分析

言うまでもないが志願者と受験者は同じではないし、また合格者と入学者も同じではない。受験機会複数化以前と比べると志願者と受験者、合格者と入学者の差は極端に大きくなった。当然受験者や入学者などの属性には大きな変化があった。各大学は、従来継続的に行ってきた調査研究方法、各種のアンケート調査、追跡調査などの方式を駆使して受験者等の属性の変化について研究している。具体的調査研究項目は多岐にわたるが、特に(a)受験者・合格者・入学者の属性の出身地別、出身高校別、現役・浪人別、男女別等に関する調査分析、(b)併願大学（国公立、私立を含む）に関する調査研究、などを詳細に行った大学が多かった。なお、数年前から

教員養成系大学で、必ずしも教員養成を前提としない課程やコースを設置する例が増えているが、このような教員養成系大学の変質に対応するための調査研究を行った大学があった。

### 2 入学辞退者

入学辞退者は受験機会複数化以前にもあったが、複数化後にかなり一般的に見られるような、辞退者が入学定員の数十パーセントにも及ぶなどということとはなかった。この傾向は、医・歯系大学（学部）に顕著であった。ほとんどの大学は、至上命令とも言うべき定員確保のために、辞退者数をできるだけ正確に予測するための方法を否応なしに研究開発せざるを得なかった。

入学辞退者と出身地、併願大学（国公立、私立を含む）、合格順位あるいは得点順位、男女別等との関係が詳細に調査研究された。また第2次募集合格者の辞退者についても同様の調査が行われた。この種の研究開発の際に困ることの一つは、志願者あるいは受験者が必ずしも論理的に行動しないということであろう。嘘か本当かわからないものも含めて、洪水のような受験情報に左右されて情緒的に反応する受験生の行動は残念ながらとても予測できない。しかしながら、62年と63年の2度の受験機会複数化の経験を経て、各大学はある程度信頼できる入学辞退者数推定のための統計的な方法を開発しつつあるように思われる。

私費外国人留学生試験の入学辞退者が極めて多い事実に着目して、その問題点を整理した大学がある。私費留学生選抜2次試験の実施日が全くバラバラで、極端な複数受験が可能な現状を指摘したうえで、専門別に全国的あるいは地域別にある程度の統一化が必要ではないかと提言している。

### 3 その他

#### ●連続受験者

連続受験者とは、昨年の入試で不合格になり、同じ大学を今年受けた受験生を言う。2大学が連続受験者について報告している。浪人1年、2年以上の連続受験者について継続的に調査し、一般に連続受験者の共通1次試験成績の向上が見られ、浪人年数の少ない連続受験者ほどその向上が著しいなどとしている。

#### ●第1次募集学生と第2次募集学生との比較

例年と同じように、学内成績・勉強意欲その他の面で、2次募集学生が1次募集学生に比べて決して劣らないとする評価が多い。その中で、第1次募集不合格で、定員留保第2次募集（通常の2次試験は免除）で合格となったものが初めて10人出たという事実を報告した大学があった。これらの合格者は、共通1次試験成績は高得点であったが、2次試験成績が悪いために第1次募集で不合格となったものである。また神戸商船大学では昭和62年から全学科で第2次募集を実施しているが、航海学科を除き2次募集生の方が入試成績がかなり高いと報告している。航海学科2次募集生の入試成績が高くない理由として、航海学科は高度に専門的な学科であり、

この学科を設置している大学は神戸商船大学と東京商船大学の2大学のみなので、航海学科の受験生母集団が事実上同じという事情によるとしている。いずれにしろこの二つの事例は、受験機会複数化の制度がもたらした影響と解釈されよう。

#### ●現役・浪人の比較

現役・浪人の入試成績、合格率などの比較を文科系と理科系に分けて分析した大学がある。その結果によると、入試成績については文科系では現役・浪人に差はないが、理科系では浪人に高い有意差があり、合格率についても文科系では現浪間に差は認められないが、理科系では明らかに浪人の方が高いとしている。また、ある医学系大学で受験生を現役、1浪、2浪以上、大学中退、大学在学中、大学卒の6グループに分けて合格率その他について調査を行った結果、他大学卒業者の合格率、従って入学率が特段に高く、しかも前年よりもさらに高くなったと報告している。さらに別の医学系大学では、他大学を卒業して入学し卒業した者に対するかなり長期にわたった追跡調査を行っている。また、国家試験不合格者に対する調査を浪人期間の長さ別に実施している。

#### ●その他

受験機会の複数化によって、受験者の地理的流動性が増したと報告している大学が多い。また多くの大学では、主要高校別に受験者、合格者、入学者等について継続的な調査研究のデータを蓄積している。さらに、主要高校の進学指導担当者との懇談など、大学と高校とのいろいろなかたちでの交流を重視して実践している大学も増えている。